



名誉会員章を受けた加藤、佐藤両会員／撮影・小倉 厚

今年も恒例の年次晩餐会が12月5日(土)午後6時から新宿の京王プラザホテル花の間で開かれた。今回は理事、監事、評議員が各テーブルに赤いリボンをつけ、テーブルマスタとして一、二名ずつ坐り、出席者全員和やかな楽しい晩餐会となるよう配慮された。

当日の会の進行役は総務担当の神崎忠男常務理事が当った。最初に挨拶に立った佐々会長が生憎風邪をひいて声が通らず、神崎理事が代読した(挨拶の内容は別掲)。このあと物故会員十八名の氏名が読み上げられ、全員しばし黙祷し、色々と思いを残しながら逝った会員の冥福を祈った。

昭和五十六年度年次晩餐会 名誉会員章は 加藤泰安、佐藤テル両氏へ

続いて十一月六日の評議員会で名誉会員に推挙された加藤泰安(会員番号二二五七)、佐藤テル(一六四一)の両会員に佐々会長より名誉会員章が授与された。このあと永年会員章が山本吉之助(一二七九)、桜井信雄(一三〇五)、百瀬舜太郎(一三二四)、小原勝郎(一三三三)、国分勘兵衛(一三三八)の五会員に授与され、それぞれ盛大なねぎらいの拍手のうちにこれを受け取った。健康を害し、ステッキをつきながら名誉会員章を受けた加藤泰安会員は「近ごろは体も衰え会にも山も行かず家でじっとしているだけだが、治ればもう少しお役に立つかもしれない、しかし一寸その望みがなく失礼する」と近況を述べたあと、名誉会員に推された喜びを示した。また佐藤テル会員は



1982年(昭和57年)
1月号(No. 439)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 昭和56年度年次晩餐会……………(1)
年次晩餐会での会長挨拶……………(2)
学生部の第一次ボゴダ峰登山と今後の計画について……………(4)
日韓交流登山 青年懇談会……………(4)
科学研究委員会・医療委員会共催講演会報告
低圧トレーニングの実践と応用 島岡 清氏……………(4)
大町山岳博物館へ山岳関係資料を寄託……………(5)
海外の山では……………(6)
図書紹介……………(6)
「札幌から見える山」
東西南北……………(7)
報告……………(7)
自然保護委員会・集会委員会
越後支部・静岡支部
お知らせ……………(6)(8)
指導委員会・総務委員会
図書委員会・高所登山委員会
会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(10)
図書受入報告 図書委員会……………(11)
カット／芳野満彦

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

故藤島敏男名誉会員の言葉を引用し、「名誉会員とは聞いたことも聞かないことにし、言いたいことも言わず、したいこともせず、床の間の置き物のようじっとしていることだ」と聞かされたが、とてもそんな器用なことではできない。来たるべきJAC百周年までとて生きのびられないから、それまでもう少しJACを良いものにした。そのために口やかましくありたい」と新しく名誉会員となった抱負を述べた。永年会員を代表して挨拶に立った百瀬舜太郎会員は「五十年前、積雪期の南アルプスでいつも自分より先を歩きなかつた初登行者たちと五十年経った今日同じテーブルで顔を会わす

ことができた。また子弟など多くの人に感謝されるような山登りを五十年も続けることができた」と永年会員となった喜びを語った。この後、今西錦司名誉会員がグラスを手に乾杯の音頭をとり、各テーブルでは赤いリボンを付けたテーブルマスタが中心となって、自己紹介などしながらにぎやかな歓談が続いた。これまで晩餐会で親しく言葉を交すことなく家路についた会員も、こうして何らかの形で交歓の輪に組み込まれていった。

歓談を続ける間にイタリアのマライニ二会員からのメッセージが読み上げられたり、北は北海道、南は九州から、遥々参加した各支部長や支部会員の紹介が行われた。本会の五七パーセントの会員を擁する十九支部が次々と司会者に呼ばれると、出席している各支部長は手を上げ、盛大な拍手に答えていた。

また今回は新しい会員に期待するという趣旨で、晩餐会に出席した二十三名の本年度新入会員一人々々前の方へ並んでもらい、当日の出席者全員に紹介された。その中で会員番号の最も新しい九〇

留守番電話(電話番号31-6659)

五四番の浅野晃会員は、「念願の日本山岳会員になった」と新入会員を代表してその喜びを語った。続いてシシャパンマへ遠征した田部井淳子会員と来年チヨゴリへ遠征する日山協会の偵察隊々長だった小西政雄会員がそれぞれの隊を代表して挨拶し、日山協会の会長で本会の会員でもある今井田研二郎会員、ボゴダ峰に遠征した磯野剛太会員などの紹介があった。

こうして一通りの紹介、挨拶が終ると、それぞれの会員はあちこちのテーブルにいる知り合いの会員と旧交を暖め合い、しばらく時の経つのも忘れていた。

定刻八時をかなり回ったころ、最後の締めくくりとして西堀栄三郎前会長の音頭により全員で「雪山讃歌」を歌い、お開きとなった。

当日配られたチヨモランマをあしらった記念品を胸につける者など、それぞれ家路へ、二次会へと散って行った。

(記録・岡沢祐吉)

新名誉会員紹介

加藤泰安氏 明治四十四年(一九一〇)十一月東京生。昭和十三年京都大学経済学部卒。学習院在学時代から山岳部に属して活躍、昭和六年槍穂高冬期縦走、京大時代は昭和九年冬白頭山、十年冬興安嶺、十二年、十三年、十九、二十

年内蒙古踏査探検。戦後は昭和二十八年第一次マナスル隊々員、三十三年AACCKチヨゴリザ隊、三

十七年サルトロ・カンリ隊の副隊長、三十八、三十九年ニューギニア中央高地登山学術調査隊長。戦前戦

後にわたり海外遠征の足跡はめざましく、登山界に果たした業績は大きい。著書に「森林・草原・氷河」、「放浪の足あと」がある。

昭和五年(一九三〇)十一月本会入会(紹介者は国沢満次郎、黒田

年次晩餐会での会長挨拶

この春、西堀前会長の後をうけまして、会長に推されました佐々木でございます。

本日は、総会と共に、本会の全体的な主要行事の年次晩餐会に、かくも大ぜいの会員がお集り頂きましたこと、この会をお世話申し上げた私たちが役員一同は、この上もなく喜び申し存じております。北は北海道、南は九州と各地から大ぜいお見えになっており、また会の長老方から、新しく会員になられた方々もおいでになっておられます。どうかこの一夕を十二分楽しんでお過ごし下さい。

さて、まず本会の現況につきその概要を申し上げます。現在の在籍会員総数は十一月末で、三千五百八十名でございます。最新の会員番号は九〇五七番ですが、その会員実数との差は、会創立以来のおつくりになった方たちを始め、退会された方々、会費滞納によって除籍された方たちによって生じたものであり、因みに、本年の入会者は百七十五名、退会者は十名でした。

残念なことは物故者が少なくなかったことで、後で総務担当理事から申し上げるように、十八名おられます。ここにこの方たちのご冥福をお祈り申し上げます。

一方、本会には現在、名誉会員が二十名、永年会員が三十五名おられますが、毎年この年次晩餐会を機会に新しい名誉、永年会員をご推薦申し上げます。永年会員は一九三一年に入会され、五十年を経た山本吉之助さん外四名の方々に、また、本会の発展に対し、あるいは日本の山岳界に著しい貢献をされた加藤泰安さん、佐藤テルさんのご両名に名誉会員章をお贈りしたいと存じます。これらの方々の中には、ご都合で本日お見えにならない方もおられますことは残念ですが、加藤さんのように杖を友にわざわざおいで下さった方もおられます。皆さまにはこの上とも一そうご自愛、よりご健康で、よい山登りを

を続けられると共に、われわれ後輩のご指導、ご鞭撻を給わりたいと存じます。

さて、ここで、この一年のわが国の内外における登山の動きを省みずと、実に活発、正に驚嘆に値するものがあります。

まず、ネパールですが、本年の冬期よりポストモンズンまで、各国七十六隊の中、二十九隊が日本から出ております。

バキスタンに入つたのは三十六隊、うち十五隊がわが国からです。

インドでは、外国隊、インド隊など併せて百二十五隊、うち二十隊が日本からです。

またアラスカには二十二隊、外に南米やパミール、コーカサスにも幾つかの隊が出ており、中国にいたつては各国からの二十三隊の中、実に十五隊が日本からです。

このようにわが国から多くの登山隊が出、その中には初登頂もあり、また新ルートからの登頂も少なくありませんし、内容は別として、数の上では如何に活躍著しいかが判ります。

この中、冬期登山として目星しいものに、エベレストへの植村隊や明大隊がありました。登頂はなりませんでしたが、この冬のシーズンに成功したのは北大のバルンツェ隊のみでしたが、この隊は風力発電効果を上げているのが学生隊らしい試みでした。

本会としては、昨年のチヨモランマのような大きな登山隊を出してはおりませんが、この隊は中国より、本会学生部が天山・天脈で五カ年間行動できる許可を得て来ております。本年はその第一年として、東のボゴダ峰に登り、またその周辺を踏査して来ております。このように、若い会員たちが、一山地に、と言つても千干に及ぶ長大な山脈ですが、集中的にとりくむことも、学生部らしい活動でありまして、特に科学的な成果が期待されます。

外に、以上の各国への隊の中には、個人として本会の会員も大ぜい参加されて、著しい成果を挙げておられることは、喜びに堪えません。中で

も、田部井淳子さんの中国側からのシシャパンマの登頂、早大の松浦輝夫さんを隊長とするK2西稜からの成功は、世界的に見ても刮目に値するものと思われまふ。

また、エディントン隊のアンナブルナ主峰南壁中央稜初登攀、加藤保男さんのマナスルの速攻登頂、日本ヒマラヤ協会での、最初企図したその間の縦走こそ成りませんでした。カンチ主峰とヤルンカンの多数登頂と科学調査班の活動、禿鷹信さんのダウラギリにおけるアルパインスタイルによる登頂、長谷川恒男さんのアコンカグアの冬期登頂など、何れも見ごとな成功であります。

その外にも、各地で登頂の喜びを得られた方がおられますが、その一方、少なからぬ人々が生命を落としておられます。例えばヒマラヤ関係だけで、既に五十三人の犠牲者を出しており、外に中国で十一人、アラスカで四人、ニュージーランドのクックで三人など、本年は特に事故が多く、インド登山財団のサリー総裁からは、インド関係だけで日本の十九隊中七隊、十五人が死亡していること、その度に捜索や救助隊を出していること、それらに関し、日本側でも適当な判断を期待する旨の書簡が参つております。

これらの遭難は雪崩を主とし、滑落これに次ぎ、また高山病や凍死も含まれます。このように登山活動も盛んながら、遭難も多いことはまことに残念なこと、その悲惨とご遺族の悲嘆を見るたびに、日本の登山界全体として、慎重に考慮せねばならぬ時が来ていると切実に考えるものであります。

しかし、このような海外における高所登山のみが登山のすべてでないことは言うまでもありません。これらの活躍、成功の基礎は、わが国内での練成にあります。近年急速に破壊や汚濁を蒙りつつあるとは言え、まだ美しい自然、登らるべき山が各地に残されております。これらに分け入って、わが国独特の四季とりどりの美を賞得ることも私たちの喜びであります。また、峻しい岩場に、ピッチこそ短かれ、登攀の腕を磨き、冬期

孝雄、松方三郎氏) 会員番号一五七。昭和二十七年以降十数年にわたり理事、評議員として会務に尽くした。昭和五十五年永年会員となる。

佐藤テル氏 明治三十七年(一九〇四)八月北海道夕張生。旧姓中村。黒田初子、村井米子氏らと共に日本における女性登山者のパイオニア。昭和元年冬富士山、三年から十二年まで毎冬北アルプスで積雪期の登山をし、十三年一月南朝鮮、智異山、十四年一月金剛山に登った。また昭和六年東京Y.W.C.A.山岳会を友人二、三名と創立したが、日本における女性山岳会の嚆矢であった。昭和三十六年女性だけのパーティの隊長としてニュージーランド登山。著書に『女五人ニュージーランドを行く』、『誰でも行ける楽しいヒマラヤ』(ともに共著)がある。

昭和十一年(一九三六)三月本会入会(紹介者は鳥山佛成、松方三郎氏) 会員番号一六四一。終身会員。昭和四十六年以降十年にわたって評議員、海外委員会委員、或いは委員長として会務に貢献し、現在も活躍中、殊に本会代表として二回にわたりUIAA総会へ出席した。また婦人懇談会の育成にも尽力した。(望月記)

会費は安く 納入願います

には氷雪の技術を練ることなども出来ます。登山関係の雑誌を見ても、如何に毎月、新しいルートが、特にヨセミテ方式などで開かれていて驚かされます。高さと低いですが、そうした登山それ自体、喜びであると共により高きへの基礎訓練として十分役に立つことではないでしょうか。

しかし、一方、こうした山々をいつまでも訪ね、登るに値する美しさを保つための努力も忘れてはならないと思います。海外において汚物遺棄で悪評高い日本隊の所業は、国内における平常の無関心に基づくものとする、例えれば日本の各所の登山基地での塵芥の散乱などがそれですが、これもやはり国全体の登山界の問題として、今更ながらですが、考えねばならぬことだと思えます。

山登りは好きだが、自然はどうでも良いと言ふのは、単なる山屋、職人に過ぎません。愛する者の汚れ、傷ついているのを見て、誰が黙っていることが出来ましょうか。美しい自然をよりよく保ち、育てることこそ、自然の極致である山を愛するの道であり、近々、急速に登山の様相が変わって来ます。アプローチの容易さ、登山器具や装備の進歩、それに経済的な背景が加わっての大衆化、一方商業化の面も強く現れ始めております。また、高所登山においては無酸素登攀、いわゆるアルパインスタイル登山、大量登頂、クリーンクライミングなど、新ルートの開拓と併行して、新しい傾向として認められますが、これらは、十二分の鍛練の後には得られるもので、われわれも言うわけには参らぬことを銘記せねばなりません。

こうした中で、わがJACは如何にあるべきでしょうか。会では従来通り会員独自の多様な登山が一そう盛んに行われることを期待すると共に、会が主体となる、適切な目標と方策に基づき大きな隊を海外に派遣すること、会員皆さんの合意を得られれば望ましいことも考えております。

さて、ご承知のように、本会には十九の地方支部があります。私が会長をお引き受けした理由の一つに、長らく札幌にいたから、地方会員の心情も判るだろう。会員の六割を占める支部会員のた

めに働けと言ふことがございました。単に「会報」や「山岳」を受け取る会員でなく、会員であることがよかつたと思つて頂けるよう役員も努力するにやぶさかでありませんし、現に、後で述べます各委員会においても、東京近在に住む者のみならず、各支部からも、積極的に委員として参加して頂くという機運にあります。こ



した活動を通じ、又会報を利用して、本部と支部の活動状況や行事の予告などが行われるならば、会員間の連帯が強まり、ひいては本会の隆盛を齎らすものにもなるかと存じます。

今申し上げました委員会ですが、これは総務、財務を始め、会報、山岳、山日記の編輯、上高地の山岳研究所運営、図書、書評、集会、指導、海

年次晩餐会出席者署名 12月5日 P.M. 6.00~ 新宿京王プラザホテル

外、高所登山、遭難対策、医療、自然保護、科学、学生部やそのOBの青年や婦人懇談会などがこれですが、これに本年から登山に関するフィルムの保存の委員会が加わり、更に今西元会長の提唱により、乱れつつある山名の検討委員会も生れようとしております。このように各種の委員会を持ち得ることは、多士済々の本会ならではのことで、それが、それぞれ設立の趣旨を体し、一そう活発に機能を果たされることを希望致します。

理事や委員は本年その三分の二の交代を見、新しい意気込みで動き始めておりますが、その一端は、会報でご承知のように春に行われた全体委員会にまず現われ、委員会相互及び地方との連繫を図ることを始めとし、本会が如何にあるべきかを終日討議致しました。その効果はまず会報誌面にも現れ始めておりますし、自然保護委員会では地方委員を既に設けて、動いており、また、青年と婦人の面懇談会は、ドイツやインド、韓国との親善交流登山を以前から行っており、親善交流登山が将来一そう高まることは、単に情報や技術の交流に止まらず、国民相互の理解につながる上で有意義なことと考えます。

本会のように、老若男女を問わず、いろいろなレベルにわたり、かつ全国に会員を擁する会にあつては、会員の皆さんに万遍ない奉仕と言ふことは至難のことですが、むしろ会員諸士が積極的に諸行事に参加し、また委員会を介して活動されることによって、会員としての意義を見出し得るのではないかと思います。

以上、本会の現状と問題点、将来の展望などにつき申し上げました。何はともあれ、本会の存在を意義あらしめるのは、会員の皆さん自身であります。本会の会員であることが誇りであるような、同時に会員であることが嬉しい、そうした会に致したいものです。

本々が、その一つの行事として楽しい宴となることを急じております。どうぞ皆さん充分に歓をお楽しみ下さい。どうもご静聴有り難う存じました。

学生部の第一次ボゴダ峰登山と

今後の計画について

学生部主催によるボゴダ峰（中国、新疆ウイグル自治区、五四四五）登山隊は、すべての行動をおえて、十月十二日に全員無事に帰国しました。前半の活動については、すでに「山」436号でご報告した通りですが、あらためて隊の活動を要約すると、以下のようになります。

一、主峰、北東稜よりの第二登山、第二の高峰（五三六二）
東稜よりの試登（標高約四八三〇）まで

三、ボゴダ山群主要部の一周及び主要な氷河からの偵察

このように、登山としては隊の規模、期間の割にはいささか地味な結果に終わったわけですが、この点は当初よりある程度まで予想していたことでもあり、さまざまな目的と経歴のメンバーが、各々の力に応じて楽しい登山、旅行をしてこられた点で一応の成功と考えています。特に、従来、未知の領域であったボゴダ山群の東面、南面を、自由に探る機会を得られたことは、大きな収穫でした。

もともとボゴダ山群の登山については、学生部を中心とする若手会員の活動分野をできる限りひろげることが意図して、五カ年計画として企画されたもので、今年の

隊は、その第一次隊として、今後の活動の可能性をさぐることに主眼がおかれていました。詳しくは隊の編集した報告書、「山岳」などでべたいと思いますが、山群の主要なピークを結んでの縦走、未踏の魅力的ないくつかのルートなど、登山に限っても、目的に応じてさまざまな対象のえらび方が考えられます。従来、中国での登山の実施にとって難点の一つであった、経費面の問題についても、中国登山協会の好意的な配慮もあって、ある程度、他の地域との較差が縮まってきたように思えます。

登山隊は報告書の発行によって解散しましたが、隊員の有志によって、あらたな活動が開始されました。その第一は、第二次ボゴダ登山計画の具体化で、三月を目途にチームの編成と目標の決定をしたいと考えています。第二は、対象をボゴダ山群からより広く天山一帯にひろげての研究会活動です。当面、前者は学生部を窓口とし、後者は「天山研究会」として活動しますが、会員の誰もが参画できるオープンな性格のもので、興味をお持ちの会員は、どうか担当あてにご連絡下さい。

（鹿野勝彦）

日韓交流登山

青年懇談会

青年懇談会は、十月九日から十二日まで、日韓交流登山隊を韓国に派遣した。

五十六年五月、韓国・仁川市のオルム山岳会から李会長ら五人が来日され、そのとき、青年懇談会で受け入れ体制を整えたという縁で、今度の訪韓が実現したのだが、今回は折井前副会長をはじめ、事務局の杉山さん、大先輩の

広羽さんも参加され、和気あいあいのうちに交流登山を終えることができました。

参加者は、このほか高橋理事（隊長、西村理事（事務局長）と、佐村青懸委員長（登攀隊長）と、坂本、千葉、三沢、那山、小原、中川、中沢、若林、那倉、谷村、滝、岡島の計十八人。

十月九日早朝、絹川前青懸委員

科学研究委員会・医療委員会共催講演会報告

〔昭和五十六年十月二十三日（金）十八時三十分～二十時（ルムにて）〕

低圧トレーニングの実際と応用

名古屋大学総合保健体育科学センター

島岡 清氏

私達は一九八〇年から一年にかけて、名古屋大学環境医学研究所にある低圧実験室を用いて、六千級から八千級の高山に遠征する四つの登山隊に対して、それぞれ低圧トレーニングを行い、良い結果を得ることができた。今日はそれらの結果についてなるべく具体的に話したいと思う。最初の低圧トレーニングは、一九八〇年六月マッキンリー（六一九二）に遠征する高山研究所遠征隊の隊員二名に対して計四日間行った。低圧負荷は初日 四千、二日目

五千、三日目 六千、四日目 七千とし、それぞれの高度で自転車エルゴメーターによる運動を行った。

長の見送りを受けて、箱崎を出発、午前十時五十分発の大韓航空に乗って、午後一時、金浦空港に着。その足で韓国民俗村を訪れ、夜はオルム山岳会との交歓パーティー。大変なごちそう攻めにあい、一同感激する。高橋、西村、那倉、勝山、三沢の五人はオルム山岳会員宅に泊る。

十日午前六時、仁川発。北漢山・仁寿峰の岩登りに向った。鉄道で京城まで行き、そこからタクシである。西村、広羽、杉山、滝の四人は仁寿峰周辺のハイキング

運動強度は、平地での最大強度の約半分程度の負荷とし、これを二・三回にわけて計一時間程度行った。低圧暴露時間は計二・三時間であった。その結果、彼らはマッキンリーではほとんど高山症状を感じることなく、きわめて早い速度で登ることができた。一九八〇年十二月には、高山研究所のアコンカグア（六九五九）遠征隊員に対して、二・三日間の低圧トレーニングを行った。

低圧負荷は四千から始めて千ごと高度を上げ、それぞれの高さで十二分間の運動を行う漸増負荷法とした。最終的な低圧負荷は六千であった。低圧暴露時間はさほど多くなく、低圧を体験してみたといった意味合いが強かったが、それでも四千地点のベースキャンプに短期間に入った直後から、ほとんどの隊員が登山活動を始めることができたという点で評価できた。

七千級の登山に対するトレーニングとして、一九八一年七月に、川崎市教員隊のムスタール・アタ北峰（七四二〇）登山隊に対して四

のため、バスで直接北漢山へ。

岩登り隊は、まず全員で仁寿峰下部でトレーニング。後に一般ルートに取り付いた。フリクションをきかせ、思い切ったバランスで登る。岩は堅く、気持ちが良い。七十歳になる折井さんも見事なバランスで登り切り、「さすが、滝谷の主」とみんなをうならせた。続いて高橋、勝山、谷村がオルム山岳会員のリードで有情Aルートに、中川、三沢、小原、那倉、千葉、岡島が仁寿Bルートと同じくオルム山岳会員とともに挑戦。岩は乾いて、クラック、チムニー、カンテ登りに変化に豊んでいる。人数が多いため時間がかったが、岩登りらしい岩登りを十分楽しんで午後六時すぎ、仁寿峰頂上に立った。

ハイキング隊は、西村、滝のベアと広羽、杉山のベアとに別れ、「穂高の北尾根ぐらい」(西村)という岩稜歩きを楽しんだ。

十一日、本拠を仁川から京城に移し、荷物を京城のホテルに置いて、高橋ら九人が仙人峰へ。日曜で人が多かったため、下部二ピッチを全員で何度も登り、トレーニ

大町山岳博物館へ

山岳関係資料を寄託

本会では下記の山岳関係資料を長野県大町山岳博物館に寄託することにし、昭和五十六年十二月五

ングをした。折井らは京城に残って市内見学。夜、韓国料理店で、オルム山岳会が再び盛大なパーティを開いてくれた。酒が出て、歌がでて、気持ちの良いパーティだった。その後、ホテル近くの屋台で、中川、佐村、岡島が新鮮なイカ、タコ、アナゴを見つける。独特の味付けで非常にうまい。食べても食べてもまだ舌が要求する。午後十一時半には全員で屋台を占領した。

十二日、韓国山岳会の招待で昼食会。高橋ら八人が出席、韓国側は金副会長ら八人が出席された。昼食をつつきながらの山談議だが、話ははずみ、今後お互いにもっと交流を深めようということ意見が一致した。特に若い世代の交流を盛んにしたいという方針も確認し合った。

わずか四日間の旅だったが、そして参加者が二十歳から七十歳までのバラつきがあったにもかかわらず、全員がそれなりの山登りを楽しめたこと、また韓国山岳会との突っ込んだ話し合いができたことなど、大きな収穫をあげ得たと自負している。(岡島成行)

日間行った。低圧負荷は、初日 五千、二日目 六千、三日目 七千、四日目 八千(但し八千は短時間の滞在)として、それぞれの日に、四千から最終高度に到るまでの千ごとに運動を行った。その結果、彼らは四八〇〇のベースキャンプに入った時点で一たん全員が高山病にかかったが、三八〇〇地点まで下って一日の休養をとった後、約一週間で初登頂することができた。登山開始時に急激に高度を上げたにもかかわらず、四二〇〇地点までは、全員が全く高山症状を感じていないこと、及び一たん休養を取った後はかなり快調だったこと等から、ある程度の効果はあったと考えられる。一九八一年四月には高山研究所ダウラギリI峰遠征隊に対して、同様の低圧トレーニングを行なった。隊員がすでに豊富な高所経験を持っていたことから、低圧負荷は、初日 六千、二日目 七千、三、四日目 八千、一週間おいて五、六日目 八千とした。これはきわめて強い低圧負荷であり、高所経験が十分でない限り無理である。この場合、隊員は三

日目に八千での運動が可能であった。但しその後は体調をくずし、八千での運動を完全に遂行することはできなかった。この登山隊は、天候のために、カトマンズに着いてからベースキャンプに入るまで、約一カ月を要し、低圧トレーニングの効果を見るには期間が長すぎるが、結果的には先隊員がダウラギリI峰(八千)に単独で登頂した。これら四つの低圧トレーニング実験から以下のことが言えると思う。(一)平地で強い体力を持つ者ほど低圧下で運動した場合にも強い。(二)高所経験の多い者ほど低圧トレーニングの効果も大きい。(三)実際の高所登山では、平地での体力トレーニングと高所経験が大変重要である。以上、これまで行ってきた低圧トレーニングについて要約したが、今後はもう少し生理学的メカニズムについても研究し行きたいと考えている。出席者 金坂一郎、高本信子、黒石恒、渡辺兵力、高遠安、草野延孝、山本正嘉、長島正浩、竹内雅雄、他十六名(この原稿は南極昭和基地から届きました)

博物館資料寄託書

昭和56年12月5日
大町市教育委員会殿
社団法人 日本山岳会

佐々 保雄
左記のとおり資料を市立大町山岳博物館へ寄託いたします。

記

①寄託資料は寄託者の請求により返還する。

②寄託資料の天災、その他不可抗力に対する損失に対してはその責を負わない。

目録

品名	数量
高頭仁兵衛氏使用のピッケル	1
武田久吉氏の遺品	1
スキー、ストック	各1
金剛杖	1
登山用シャツ	1
携帯用提灯	1
脚半(紺)	1
写真用三脚	1
登山記念焼印板	3
カメラ(ケースボックス入)	1
スキー靴	1
小田原提灯	1
敷皮	1
ミゴハバキ	1
ガマハバキ	1
弁当コウリ	1
下駄	1
リュックサック	1
撮影スライド板ケース共	25
ダークバック	1
飯盒	1
富士登山関係資料	500
周布光兼氏購入の初期のころのアイスアックス	1
チョモランマ・カラー全紙	1
秩父宮殿下肖像モノクロ	1
写真	1

皆香園の昔を偲ぶ寄書
鹿子木氏使用のピッケル
嘉門次使用のワカン

以上

1 1 1

会費を納めて下さい

図書

紹介



札幌から見える山

朝比奈英三 編
鮫島惇一郎

札幌を訪れた人なら、誰しもが周囲を取りまく山々に目を見張るであろう。北大寮歌で名高い手稲山、そして藻岩山、更に恵庭岳と一連の山ながみが続き、石狩平野をへだてて東に夕張山脈、北に増毛山塊と多くの山々が眺められる。本書は数多い山の中から代表的な山を十九座(神威岳と烏帽子岳、樽前山と風不死岳は構図上二座を一座とみなしている)で実際には二十一座)を選び、坂本直行

お知らせ 第十回山岳史懇談会

日時 3月13日(土) 16時より

昭和六、七年ころの早大山岳部の話を今井友之助、折井健一、五十嵐俊治の各氏に伺います

図書委員会

さんを囲むグループ「歩々(ぼっぼ)の会」のメンバー十九名によって、一人が山を受持つて描き上げています。油絵、水彩、張り絵、切り絵、版画など多彩でありそれに各山ごとのエッセイを朝比奈英三氏と鮫島惇一郎氏が分担し、カラー写真は小泉章夫、高橋仁氏等によるものであるが、それぞれの山の特徴を四季折々でよくとらえ、絵と写真と文章でアンソロジーを組んだ美しい絵本である。

見返しには開拓記念館から撮られたパノラマ写真と、豊平橋とテレビ塔から描いたスカイライン図で山のありかを更にわかりやすくしている。目次のページには二〇万分の一地形図を配し、理解に役立たせている。

昭和五年六月に発行した札幌二中山岳旅行部「スタック」二号に坂本直行さんが、今井呉服店(現在の今井百貨店)の屋上から描いた札幌市南方及び西方山岳概略スケッチが折り込みで挿入されているが、今回の鮫島氏の手によるスカイライン図とはほとんど変

海外の山では……

近着の「アメリカン・アルパイン・ジャーナル」(一九八一年、V23)にダビッド・マックラング氏による「ヒマラヤ登山における雪崩遭難」の小論が発表された。これによると、各国別死亡率は、地元ポーターに続いて、日本が最高という不名誉な統計が掲載された。もちろん年間五十隊を送り出す日本は、西側刊行物には報告されないものもあるが」という注釈付きで……

これは、アルフレッド・ママリがナンガ・パルバートで遭難した一八九五年から一九七九年までの集計によるもので、資料はジャーナル、報告書、雑誌から集められたとされている。同小論によると、これまでの雪崩遭難死はポーター(シェルパを含め)が八十一人で、四パーセントと圧倒的である。これに続くのが日本の三十一人、一六パーセント。ついでイギリスの十七人、九パーセント、以下ドイツ、アメリカとなる「イギリスは長い歴史からだが、日本はここ十年間、急激なヒマラヤ登山隊の増加」がこの結果を生んだ、としている。

手元の資料では、ネパール開禁後(パキスタンも含む)、一九七九年までの十年間、三十五人の雪崩遭難による死者があり、マックラング氏と、そんなに誤差はない。

ついで、シッキム、ネパールの東部ヒマラヤ、インドの中央ヒマラヤ、パキスタン・カラ



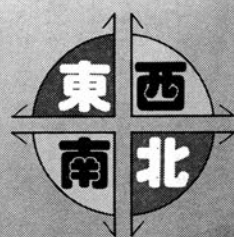
カット・芳野満彦

コラム、ヒンドゥックシユの四地域における雪崩死亡者数を分類して、東部ヒマラヤ(ネパール)が圧倒的に多く、百三十人の六六パーセント、ついでパキスタン・カラコラムが四十八人、インド十八人、ヒンドゥックシユ二人となる。いわば「東高西低」の分布であり、その理由は、モンスーンの直撃するシッキム、ネパールに、まず大量の降雪があること、そして、モンスーンが登山期間を中断して、ブレ、ポストの二シーズンに分かれて短期なため、登山期間を早め、積雪多量な時期から開始を余儀なくされることを指摘している(日本隊だけでも、ネパール二十四、カラコラム十、インド一―手元資料)

従って、パキスタンは降雪が少なくことが雪崩遭難を少なくしている。しかし、大氷河はむしろパキスタンに多い。これはネパール・ヒマラヤが地形的に急峻な反面、パキスタンは高所で、プラトール状地形が多いことをあげている。ただパキスタン・カラコラムの四十八人は、ナンガ・パルバートの二十人という大量の雪崩遭難があることを頭に入れておく必要がある。

このほか、雪崩タイプによる分類もマックラング氏はあげ、テント内における遭遇が八十六人の四三パーセントでトップを占める。いずれにしても「予想もつかないヒマラヤの雪崩」という、なかなかに諦めた、不可抗力として、雪崩を天災扱いしないで、これからのヒマラヤ登山の安全度を高める意味から、氷河学を含め、雪崩に真正面から取り組むべきだろう。(片山全平)

謹賀新年



瓢湖の白鳥／越後支部・高橋庄一会員提供

小田急沿線会員の
親睦山行報告

都内と神奈川県の小田急沿線に住む会員が集まり、丹沢山麓の山宿で一泊を語り、翌日は仏果山、中津溪谷へのハイキングを行いました。

私も山岳会員で支部に属さない会員は数が多いせいか、近くに住んでいても顔を知らない方がほとんどで、私のように入会間もない者は少しばかり淋しい思いをしていましたが、厚木市に勤務しておられる折井前副

あり、最終的には九名の方が参加されました。

集まられた方は発起人の折井さん、鳥居さんをはじめ、網蔵先輩や地元幾徳工大の若い会員と、紅一点として近藤緑さんが信行さんに代って出席されました。

話はおっぱら大先輩の、それも山行外の平素きかれない秘蔵の内証話に興が集まり、網蔵さんの芸能界でのめざましい活躍や、鳥居さんの飛行機操縦の話など興味深いものでしたが、何と言っても酒の全然といったいほど呑めない折井さんが、山の帰りに水を所望

会長と同じ厚木市内で執筆されておられる近藤信行さんなどから声がかかり、昨年夏の七月厚木市内でささやかな会合を行ったのがきっかけで、呼びかけの範囲を小田急沿線に広げ、水没間近の中津溪谷の探索と手頃な山へのハイキングが実現したものです。会員名簿には三十数名の方の名前が登録されており、その中で、全ての方に手紙で照会したところ十名を越す申し込みがあり、楽しみにしていたのですが、当日近くになって止むを得ぬ公用で取り止めの方もあり、最終的には九名の方が参加されました。

この集会は年二回くらい丹沢を中心に行うつもりでおります。当面厚木市中心で集まっておりますが、都合がつく方はふるって参加して下さいよう幹事一同願っております。

参加者 折井健一、鳥居 亮、網蔵志朗、大森薫雄、近藤 緑、三栖寿生、狩野芳郎、関 喜義、古谷聖司 (古谷聖司)

会 員 通 信

雁峠に至る山道にも、笠取山への急坂にも、ゴミが全然なく感動しました。

スイスのフィルストでマルタ老夫人に会いました。皆さんによろしくとのこと。 菅見愛子

らず、ただ札幌市も高層ビルが立ち並び、見る場所が変わってきたことを物語っている。

本書の「あとがき」にある通り「この本は、勿論山の案内書ではなく、またスケッチ画集や写真集そのものでもない。強いて言えば、札幌の街角で、ふと見上げた空の彼方に見える山々をなつかしむような絵本である」と、このつましやかな心情がよくにじみ出ている、自然を愛する人々の心のこもった作品である。

一九八一年五月十日 北海道大学図書刊行会発行 B5判 四十三頁 定価千四百円 (高沢光雄)

報 告

自然保護委員会

第六回上高地集會

さる十月二十四日(土)と二十五日(日)の両日にわたって第六回上高地自然保護集會が開かれた。今回の集會は支部との交流を深めることに重点を置き、二十四日午後四時から環境庁ビクターズセンターで集會、午後六時から山研ロビーで懇親會、翌二十五日は自然と親しむことを主眼として徳本峠越えを企画した。しかし上高地は三日続きの雪に加えて二十五日はミズレまじりの天候となったため、残念ながら峠越えは中止となった。

二十四日の集會には環境庁、安

曇村からの参加者に加えて、地元信濃支部、越後、富山、東海、熊本、北海道の各支部、一般会員、自然保護委員など三十三名が参加し、中村担当理事の歓迎の辞と司会により始まった。

渡辺委員長挨拶は自然保護委員会の今後の活動方針を中心としたもので、登山者のモラル向上を初心にかえて問い直したい。このため登山者の行動指針となるフィールド・マナー・ノートを作成に取り組み。ついでJACの各委員会や支部の皆様と協力を求めたい。自然破壊の問題についてはケースごとに柔軟に対処したい。基本方針として地元の判断、意見をつかんでいる当該支部の意向を尊重し、山岳会として取り上げる。ダム、道路などの建設の情報が伝わる時は計画が固まって活動は手遅れになるケースも多い。今回は支部の情報、抱えている問題、ご意見を聞く会にしたい、というものであった。

支部からの情報 北海道では日高、大雪のほか、風運湖保護問題が生じた(井手氏)。信濃では梓川河床上昇の防止策として、景観保全、観光客の安全のため明神と徳沢の間にダム建設計画があり、現在測量中で、来年図面ができる(安曇村役場宮本氏、支部蒲生氏)。富山支部では立山の雪鳥の減少(野島氏)。熊本では祖母、傾山の伐採がひどい、あとに植えた

杉は景観にそぐわない、九州の山地国定公園は開発で山相が変わってきているところもある(石井氏)。越後は「ゴミ会議が活動の中心だが、妙高道路は撤回させた。道路建設は生活が観光かを判断しながら柔軟に対処したい」(猪俣氏)などの報告があった。

登山者のモラル向上については猪俣ゴミ会議議長は「登山者がゴミになるようなものを持ちこまないと同時に、小屋が売らないように指導している」という清掃だけでなく、前向きなクリーン作戦展開の意見が出された。

このほか、出席者の感想として「何故上高地で開かなければならないのか。場所として集り難い。上高地集会の意義は何か?」「自然保護の問題は長時間の討議が必要である」などが出て今後の課題となった。

終りにビデオセンターを提供し、一六ミリ映画「上高地の冬」の上映をしていただいた環境庁の方々、珠味の差し入れや集会の準備でご協力をいただいた信濃支部の方々、徳本峠越え中止に伴い、リンゴ園にご招待下さった百瀬一茂氏に紙面を通じてお礼申しあげます。

参加者・敬称略(北海道) 井手貴夫、(越後) 猪俣信市、飯田武夫、阿部静江、(信濃) 蒲生明登、奥原敦永、上條輝夫、百瀬一茂、百瀬一臣、日置邦、(富山) 野

島福三郎、千田又一、(東海) 尾上昇、(熊本) 石井久夫、(環境庁) 高橋正浩、山本信雄、藤岡毅、(安曇村) 宮本肇、(一般会員) 斎藤桂、小西奎二、松沢節夫、渡部温子、(自然保護委員) 織内信彦、渡辺正臣、中村純二、武田満子、木名瀬亘、坂本正智、近藤緑、関塚貞亨、麦倉啓、中村あや、小林茂

集会委員会主催

秋のスケッチ山行

昨年十月上高地山研に集合して、清野恒画伯のご指導の下に秋の上高地付近第一回スケッチ会を催したところ、大変好評で、年に一回くらいは是非実施したいとの声があり、今年も集会委員の方々の計画の下に第二回の会合が八ヶ岳山麓で行われることとなった。

十一月一日(日) 飛石連休の天気は余り芳ばしからぬ予報であった。夕方までに野辺山の会員新海文人氏経営の民宿「りんどう」に集合。駅には集会委員の方が宿のマイクロボスで迎えて下さる。タ刻清野先生ご夫妻始め十数名の参加者ほとんどが集り、早速屋上へ出て暮れ行く八ヶ岳連峰のスケッチに取りかかる。金色の唐松林を前景に赤岳、横岳、硫黄岳に細長く雲がたなびき連山のシルエットも刻々と紫から黒へと変わって行く。相当ひえる。

二日、昨夜は相当ひどい雨だったらしい。朝になっても小雨が残り八ヶ岳も全く見えな。一応出掛けましようと思持参、宿のご

スキー登山技術講習会開催について

スキー登山入門の技術を学ぶ、スキー登山技術講習会を乗鞍岳周辺で行うことになりました。参加希望者は山岳会ルームまで連絡下さい。

日時 2月19日(金)～21日(日)

で、前夜発の三日間。

場所 新年早々に決定。

募集人員 三、四十名。

指導講師 松永敏郎、降旗義道、小林政志、磯野剛太、奥原宰、桐生恒治。

宿泊 山小屋利用(自炊)。

◎詳細は事務局まで。会員外でも会員の紹介があれば受け付けますから振ってご参加下さい。

(指導委員会)

日本山岳会マーク入りの「トレナー」の販売

かねてより会員からの要望が多かった「トレナー」(長袖、上のみ)を、限部恵子会員のデザインで今冬より製作し販売します。最近ではトレーニングのた

主人の運転で廻り平金峰山荘に着く(無人小屋だが畳敷の部屋が三つ、台所付の結構な小屋だ)。三々五々皆さん適所に画帖を開いたが

めだけでなく街のおしゃれ着としてセーター代わりに着るのが流行です。

各種の集会や小山行にはぜひ揃いの「日本山岳会トレナー」で集まりがより一層楽しくなることうけあいです。

色 紺、グレー

サイズ M、Lの二サイズ

販売価格 二千八百円(送料別)

(注) L・Lサイズは特注で、色はグレーのみ。三千五百円。S

サイズはグレーのみ僅少あります。



お申し込みは事務局まで

なお、地方の会員の方はなるべく支部で注文をまとめてお申し込み下さいますようお願いいたします。

また、昨大好評で品切れとなりご迷惑をかけましたTシャツ、今年も春より作ります。ご期待下さい。

雨は止みそうもない。どんより厚い雲が憎い。水彩は乾くところか小雨が降りかかりおまけに風と共にカラ松葉が画面に張りつく仕

さい。

(総務・財務委員会)

お知らせ

図書交換会出品図書

の販売について

昨年の図書交換会に出品のあった左記図書を販売いたします。

希望者は左記により期日までにお申し込み下さい。

一、販売図書および価格

(一)「山岳」日本山岳会編第四十三年一巻一第七十四

年、戦後版揃一括十万円

(二)「日本の山岳名著覆刻」大修館書店、分売

鹿子木員信「アルペン行」

今西錦司「山岳省察」

冠松次郎「黒部谷」

高頭式「日本山嶽志」

『覆刻日本の山岳名著解題』

(三)雑誌「アルプ」創文社(創刊号)第60号合本・全五巻

セット)二万八千円(定価

四万円のもの)

／末。手はかじかみ全く絵を画くような状態ではない。早々にして「りんどう」に引き上げる。午後には仕方なく広間に集まり集会委員の若い方にモデルになって頂き、ヘルメットをかぶりザイルを肩にした山男姿のクロッキンダの稽古となる。一ポーズ五分間という制限付のスケッチ、ふだん余りこのような経験もないので非常によい勉強になる。これも雨のおかげか。

夕刻東京を発って来所する中川氏一行の到着を待ち、それから夕食、懇談会に入る。委員方の奮斗による山菜料理、手打ちソバの美味もまた格別である。美酒、美菜に、歌に踊りと大いに気炎も上がり、一同輪になって踊り夜も大分更ける。

三日、曇り。昨夜の雨が八ヶ岳の稜線を白く変えた。再び昨日の金峰山荘へ。委員の若人方はザイルを肩に出発、付近の岩壁に取り付く。われわれは随所に三脚を立て製作にかかったが何としても寒い。紅葉も盛りを過ぎスケッチ山行としては、聊か時期的に遅すぎた感じである。雨にたたられたのも全く残念なことである。しかし皆さん熱心に二、三の製作を仕上げておられた。十六時五十三分野辺山発の列車で帰途に着く。今時になって天気は回復か、夕焼雲に八ヶ岳が濃紫に横たわっている。終りに今回のスケッチ山行で

は、悪天候の中、ご懇切なる指導を頂いた清野先生に深謝致しますと共に、終始大変お世話になった集会委員の方々に厚くお礼申し上げ、また次回もよろしくとお願ひ致します。

なお、十七日(火)皆さんの今回の作品を額装し、ルームに持寄り、一点一点について先生に細かく批評を頂き、一週間程ルームにかざることとなった。

参加者 講師・清野恒、同夫人、白石栄三、中垣淑子、池元善秋、榎本進、三栖寿生、佐々木ヨシ江、小峰徳子、斉藤桂、上野英世、同夫人、入沢郁夫、鈴木正俊、草刈としこ、山田靖子、佐々木誠、中川武、同夫人、村木富士、菅原広男、中沢光江、若林幸子、山崎直美、秋元孝子、谷村久美代、熊谷明、小池隆志、片岡泰彦、前田文彦、神山良雄、永川憲明 (鈴木正俊)

会津と越後人の集い
玄 山 会
会場 耶麻郡西会津町

シナイ支部の越後支部に、恒例化した年間集いが二つある。七月二十五日、高頭仁兵衛翁銅像の前でする高頭祭と、名誉会員藤島玄さんを囲む玄山会である。前者は期日と会場は固定しているが、後者は会津と越後の会員が集まり易く、飯豊連峰に関係した所を会津

④ The Himalayan Journal 十二冊・分売 一九六一年、一九六二、一九六三年、一九六五年、一九六六年、一九六七年、一九六八年、一九六九年、一九七〇年、一九七一年(二冊)、一九七三、一九七四年、一九七四、一九七五年、一九七六、一九七八年。以上各二千円

二、申し込み方法
希望者は、往復ハガキに住所、氏名、会員番号および希望書名を記入のうえ、図書委員会へお申し込み下さい。なお、希望者の重複した図書は抽選により決定いたします。

三、申し込み期限
昭和五十七年2月15日までに申し込み下さい。

四、送料
購入者に負担していただきます。

・「この一本展」の開催について
年次晩餐会併設を慣例として毎年開催していたこの「一本展」を、本年度は、晩餐会開始までの短時間でしか見られない不便を解消することを主眼に、「山岳図書を語る集い」に併設することに致しました。

例年以上に充実した催しとしたいと考えていますので、左記

の通り奮って、ご出品下さるようお願い致します。

記
一、開催日は昭和57年2月20日(土)午後2時より(当日、吉沢一郎氏の「アメリカの本を語る」が併せて催されます)。

一、出品物は、山に関する珍本・稀本・署名本などで、この一本と思われるものなら何でも結構です。

一、出品物には、それぞれ簡単な解説原稿を添付して戴きます。(四百字詰原稿用紙二枚以内)原稿には、書名・著者名・発行所および発行年月日を明記下さい。

一、展示方法は、原則として当日出品物を直接ルームに持参して頂き解説原稿と共に展示し、閉会後お持ち帰り頂きます。(事前持ち込み、後日引き取りも、ご相談に応じます)

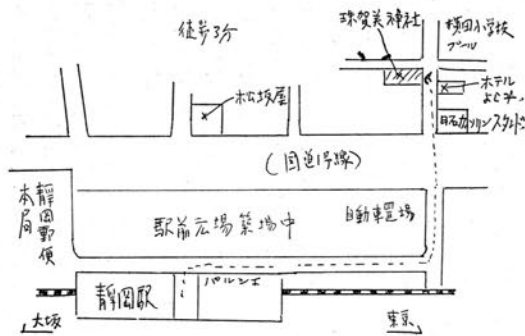
一、解説原稿は、1月20日までに図書委員会宛お送り下さい。(図書委員会)

お 知 ら せ
高所登山研究会のご案内
一 日時 昭和57年2月6日(土)午後3時30分～6時
二 場所 山岳会ルーム
三 発表形式 パネルディスカッション

四 内容
テーマ(1)高所における生理的反応や障害の克服(準備と実際)について
(2)山で遭遇した雪崩(日時・天候・形・規模など)について
五 報告(テーマにそって問題提起)
司会 雨宮 節氏
(1)山学同志会隊一九八〇年春カンチエンジュンガ峰(八五九八)北壁より登頂
報告者 川村晴一氏 坂下直枝氏 坂野俊孝氏
(2)高山研究所隊一九八一年春ダウラギリ峰(八二六七)北東稜より単独登頂
報告者 禰 博信氏
外に講師団として、金坂一郎氏(雪崩)、中島道郎氏(高山医学)、田中壮佑氏(高山医学)を予定しております。

六 申し込み 研究会運営上、参加人数を把握したいので、希望者は昭和57年1月20日まで、山岳会事務局まで連絡してください。また内容について、意見、希望がありましたら、高所登山委員会担当理事川上隆宛にお願いします。

この研究会を盛り上げるものにするためにも、多数の参加と活発な意見、質問をだしてください。(高所登山委員会)



日本山岳会静岡支部 月例 2 土会合場所

静岡支部二土会(第二土曜日)の月例集会(紹介)

静岡支部は八月(夏休み)、十一月(紅葉会)以外の毎月第二土曜日、午後6時30分より9時まで、静岡駅から徒歩三分の珠賀美神社事務所(電話なし)で会員懇親会を開催。仕事で来静の全国の会員の方々の気軽な来場を歓迎致します。一杯やりながら静岡支部員と懇親を重ねて下さい。(静岡支部)

と越後の委員が選定する。この会は議決の必要ある事項を片づけて、酒飲み会となる。

第八回玄山会は、冠雪の飯豊連峰を一望できる、会津野沢駅(磐越西線)からバスで行った大山祇神社前の光盛館を会場とし、十一月十四日(土)十八時、会津の代表矢田目昇会員の発声で開催された。越後の代表齋藤平七会員の挨拶。千葉の船橋市より遅れて到着した玄さんは、赤装束に赤頭巾を被せられ、十月七日、病気で急逝した立川重衛会員の葬儀について手短かに話して追悼の辞とし、一同拝礼した。

佐藤一栄会員の音頭で、玄さん

の喜寿の祝いの乾杯。主賓と二升入りの朱杯を持ち肩を組んだ小集団は、微笑む立川会員の遺影からあちこちと移動して回り、齋藤チヨ会員の歌謡曲となって最高調に達した。

玄山会を名目に集まれば、和気あいあい、飲むほどに酔うほどに、歌あり踊りありと他愛なく遊び呆けるのが常である。

十五日、快晴の岩越国境の銀嶺を背に、参道の落葉を踏み大山祇神社奥の院に登る。拝殿前で記念撮影。茶屋ではゼンマイ、ヤマウド、ナメコの山菜料理で二次会となる。下から運んだ一升瓶はゴロゴロ。時間となりご機嫌の紅葉色

の面々は、あれこれと銀冠の山々を指呼しながら旅館へ戻った。

出席者(県外も含む会員)

藤島玄、滝口豊子、齋藤かつら、北村猛、小出久子、平田静一郎、山田勲、赤沢清明、山岸榮三郎、唐橋宏、宅間清子、小林兼一郎、齋藤弘、野沢健吉、小野木伸夫、坂井厚、佐藤一栄、大塚八千代、上村幹雄、齋藤平七、井田正男、牧野牧夫、齋藤喜一、矢田目昇、佐竹信幸、小椋利雄、小荒井美、本田文雄、荒木吉栄、本間一人、平田大六、渡辺竜吉、齋藤チヨ、山崎幸和、早川英夫、佐藤光義、鈴木敏雄、青木督平、五十嵐恵美子、(会員外)二十九名、合計六十八名。(鈴木敏雄)

会務報告

支部長会議

12月5日午後
本会ルーム

出席者 平野明(北海道・代)、佐藤敏彦(岩手)、村上勝太郎(山形)、伊達篤郎(宮城)、中島正夫(福島)、齋藤平七(越後)、大沢伊三郎(山梨)、山本朋三郎(静岡)、中世古隆司(東海・代)、松井辰弥(岐阜)、今西寿雄(関西)、野口秋人(東九州)、西沢健一(熊本)、以上十三名
欠席者 秋田、信濃、富山、石川、山陰、福岡の六支部長

本会側出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、神崎、西村、伊丹総務担当理事

▽佐々会長挨拶、渡辺副会長会務報告、とくに地方会員、支部会員に対する対処の問題を中心に。

▽各支部長より、支部の概況(現在会員数、本年の活動状況、今後の行事予定等)について報告を行った(詳細は省略)。各支部ともにそれぞれの個性的活動をしてもらえることが判った。

▽報告のさいに触れた支部が二、三あったが、支部費を能率よく集めることで苦労している支部があり、支部費の徴収方法について討議された。その結論として本部の方でもこの問題を検討して理事会の審議事項にすることをきめた。

▽その外 本部、支部の行事の予告を出来るだけ早くしてほしいという要望がだされた。

ルーム日誌

(56年11月)

5日(木) 海外委員会
6日(金) 評議員会
9日(月) 理事会
10日(火) 婦人懇談会セミナー
11日(水) 長谷川恒男氏アコンカグア報告会
12日(木) 科学研委講演会
13日(金) ボゴダ集会
15日(土) 指導委員会講習会、集

自然・登山・探検—山岳講演集—

日本山岳会岐阜支部が設立10周年を記念して出版した山岳講演集。若干の残部を生じたので会員諸兄姉に頒布いたします。

(内容) 日本山岳会岐阜支部の設立を祝う(三田幸夫) 岐阜の山と私(今西錦司) ヤルン・カン登山に寄せて(今西錦司) ヤルン・カン登山報告(樋口明生) 登山における危険について(川喜田二郎) チベット登山の八年(西川一三) 冒険と人生(西堀栄三郎) 山と人生(吉沢一郎) 山と人—一つの自然観—(和崎洋一) 登山と科学(渡辺兵次)

B 6 版、214ページ、限定500部出版、定価1,300円、送料200円、現金書留または振替で御送金下さい。

申込先 〒503-13 岐阜県養老郡養老町中 高木泰夫方 日本山岳会岐阜支部宛 振替番号 名古屋1-16218

図書受入報告

図書委員会

昭和 56 年 10 月受入図書

- 1 柏瀬祐三 岩崎元郎 小泉弘編「日本登山大系 4 東京近郊の山/5 剣岳・黒部・立山/6 後立山・明星山・海谷・戸隠/8 八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス」白水社 1981(版元寄贈)
- 2 山川力著「山とともに在り」えぞまつ豆本の会 1981(著者寄贈)
- 3 美坂哲男著「行ってみたい秘湯 100 選」家の光協会 1981(版元寄贈)
- 4 車嘉奇著 小学館・人民中国雑誌社共同編集「シルクロード 今と昔 中 天山北路を行く 下 砂漠の古代王国」小学館 1981

(版元寄贈)

- 5 山村民俗の会編「あしな 2~5 第 21~105 輯」名著出版 1981(版元寄贈)
- 6 小森康行著「垂直の上と下」中央公論社 1981(版元寄贈)
- 7 松本健夫 松本暢郎共編「阿蘇火山—世界一のカルデラ」東海大学出版会 1981(松本健夫氏寄贈)
- 8 "The American alpine journal 1981" The American Alpine Club (版元寄贈)
- 9 "The Canadian Alpine journal 1981" The Alpine Club of Canada (版元寄贈)
- 10 "The Himalayan journal 1978-1979, 1979-1980" The Himalayan Club (版元寄贈)

田中壮吉	七九六八	訂正	平戸伸之	七二六二	(56・8 届 11 月) 退会	内田慶治	六九六八	(56・3 届 11 月)	奈良隆之助	四八五八	物故	会員移動	500 名	今月の来室者	委員会	30 日(月)	長会議	26 日(木)	イルム委員会	モランマ会、フ	25 日(水)	研委員会	保護委員会、山	24 日(火)	会	18 日(水)	チ山行反省会	懇談会、スケッ	17 日(火)	集會	委員会、ボゴダ	16 日(月)	図書
------	------	----	------	------	------------------	------	------	---------------	-------	------	----	------	-------	--------	-----	---------	-----	---------	--------	---------	---------	------	---------	---------	---	---------	--------	---------	---------	----	---------	---------	----

会費未納の方は
お早く納入願います
事務局

あとがき 昨年十二月二十五日のクリスマスの日、会報第一号の編集者だった元会員の浦松佐美太郎氏に最後のお別れをして来ました。永眠された氏の安らかなお顔の周りに花びらを散らしながら、数年前ブラヴァント老夫夫妻の写真や「会報」を差し上げたとき、氏が「しばしば遠い昔を偲ぶことができた嬉しかった」と手紙を下されたことを思っていました。

「遠い昔のことをこのようなかたちで楽しく思い出すことができたことはこの上ない幸福でございます」とその手紙は結ばれてありました。

浦松さんの死は会報の重要性を改めて考えさせるものでした。「たった一人の死」は一粒の麦のように地に落ちて、より多くを生かし、永遠へとつながってゆくに違いありません。(O)

昭和五十七年一月二十日発行

100 東京都千代田区四番町五十四

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(加) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号 印刷所 株式会社 技報堂